

マタイの福音書 第3章 17節

「また、天からこう告げる声が聞こえた。『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。』」

文化祭や運動会の季節になると生徒たちの賑やかな声、楽しむ風景があちらこちらに見られるようになる。ただ、今も続いている感染症の心配からさまざまな行事は控えられてきた。ようやくその制約も少しずつ緩和されつつある。やがて自由奔放に行事が出来るようになった日には校庭一杯に繰り広げられる競技、そこに溢れる歓声を聞くときが到来するだろう。目の前を駆け抜ける我が子の映像を取ろうと必死になる両親をみることになるだろう。駆け抜ける子以上に、見守る親が喜び夢中になってしまうほのぼのとした光景があちらこちらに見える季節がくるだろう。

愛する子を見守る眼差しは、見られるもの以上に熱く、愛情が込められている。そこに立つ存在そのものをとらえ手放して愛おしむ。そこに存在するものを喜ぶ。その愛と喜びが天から告げられる。それをそこに立つ者、そこにいる者たち、さらには世界が聞くことになる。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」この天からの御声を聞く者は、自分に思いもよらない事実を発見する。御声の中に立つとき、自分は子のみならず、愛された子である事実を発見する。そして、自分の存在が喜ばれている事実を発見することになる。天からの御声を聞くとき。

2023年6月14日